

# オリンピック・パラリンピック教育の普及の効果的な促進方法に関する研究： 教員の視点から見た実践内容に基づく課題と解決策の検討を通して

A study of the effective methods for developing Olympic and Paralympic Education：  
Through examination of issues and solutions based on contents from teacher's view.

岡田 悠佑（明治学院大学心理学部，早稲田大学スポーツ科学研究センター）

乳井 勇二（目白大学短期大学部ビジネス社会学科）

根本 想（育英大学教育学部教育学科）

深見英一郎（早稲田大学スポーツ科学学術院）

## 抄録

本研究の目的は、オリ・パラ教育を普及するうえでの課題とその解決策を実践内容に基づいて教員の視点から検討することを通して、オリ・パラ教育を普及するためのより実現可能性の高い促進方法を明らかにすることであった。教員を対象に、オリ・パラ教育の実践内容、普及する上での困難、困難の解決策の3点について質問紙調査を実施した。

その結果、体育・スポーツアウトリーチ実践について、「関心・意欲の維持」(43)が最も多い困難で、その解決策としては様々な教科を活用した「事前・事後指導」や「情報提供」という回答が多く見られたことから、教員は児童・生徒がスポーツ選手と接する機会だけでは不十分だと考えていることが推察された。次に多かった困難は「興味・関心の維持」で、その解決策としては先行研究で提案された「映像資料の活用」や「教育課程への位置づけの明確化」を促すための実践モデルの開発の必要性が示唆された。次に、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践における困難は、「効果的な指導方法」(52)、「系統的・発展的な内容の設定」(50)、「興味・関心の維持」(45)、「協力体制の構築」(29)、「用具の手配」(28)の順に回答が多かった。ここから、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践を実現した教員が、何を（内容）、どのように（指導方法）行えばよいのか、という点に不安を抱えていることが推察され、解決策として、教員に対する「情報収集」や「情報共有」によるオリ・パラ教育実践に対する肯定的な意味づけを醸成することやオリ・パラ教育実践の成功体験の重要性を示唆した。

## I 緒言

### 1. オリンピック・パラリンピック教育の普及の促進方法の妥当性という課題

2021年夏に第32回夏季オリンピック競技大会・第16回夏季パラリンピック競技大会（以下、東京大会）が開催された。新型コロナウイルス感染拡大の影響で1年延期となり、さらにほぼ無観客での開催という異例の事態となったが、全世界205の国や地域（難民選手団含む）の選手が参加し、国内では高い視聴率を記録した（日本経済新聞，2021）。しかし、オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、オリ・パラ大会）の開催がそれぞれ世界平和と共生社会という社会変革を目的としていることを踏まえると、東京大会の開催と同じくらい東京大会の開催に向けた取り組みの重要性は高い。東京大会では、開催決定後に東京大会組織委員会を中心に「アクション&レガシープラン」（東京都オリンピック・パラリンピック準備局，online）が策定され、「スポーツ・健康」等の5つの領域で方向性が示された。そのうちの1つが全国規模で普及が推進されたオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）である。特に初等中等教育段階においては、様々な教育活動と関連づけた継続的なオリ・パラ教育の実践の実現が目指された（オリ・パラ教育に関する有識者会議，2016）。そして、東京大会組織委員会の「ようい、ドン！スクール」（東京大会組織委員会，online）、開催都市である東京の「東京オリンピック・パラリンピック教育」（東京都教育委員会，online）、さらには東京以外の地域でのオリ・パラ教育の普及を目的としたスポーツ庁の「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」（以下、オリ・パラ教育事業：スポーツ庁，online）等を通

して、東京大会に向けて少しずつオリ・パラ教育の普及が達成されたことが報告されている<sup>注1)</sup>。しかし、このようなオリ・パラ教育の普及の実現可能性については、批判的な見解が示されてきた<sup>注2)</sup>。そのため先行研究では、普及の担い手となる教員の視点から見たオリ・パラ教育の普及の課題を検討し、そこからオリ・パラ教育の普及の促進方法を検討してきた(岡田ほか, 2018, 2020; 宮崎, 2019)。具体的には、教員がオリ・パラ教育の普及において、事務手続きの手間、よい実践への準備、予算の確保、担当者の定着、教員の抵抗感の払拭、用具不足といった困難を抱えていることが明らかにされている。そして、このような困難の解決策として、教員の協力体制の構築、映像資料の活用、教育課程への位置づけの明確化、安価に実施できるオリ・パラ教育実践、障がい者スポーツ協会等との連携、学校施設のバリアフリー化の促進、より実践的な知識の習得を可能とする教員研修の実施といったオリ・パラ教育の促進方法が提案されている。

しかし、先行研究で示されたこれらの促進方法には、以下の2点の課題がある。1点目は、実現可能性である。先行研究で提案されたオリ・パラ教育の促進方法は、実際に教員がオリ・パラ教育の普及に伴う困難を克服するために採用した方法ではなく、あくまで理論的に導かれたものであることから抽象的な提案に留まっていると考えられる。例えば、「映像資料の活用」という促進方法は、コンテンツの活用方法などの「ユーザーサイドからのコンテンツの利用方法の明確化」(前田・益子, 2006, p.129)が十分でない場合は有効な解決策とはならない<sup>注3)</sup>。また、教員の協力体制の構築という促進方法は、日本の教員は同僚の教員と学級経営や授業実践に関して相互不干渉である傾向が強いため容易ではないことが推察される<sup>注4)</sup>(紅林, 2007)。そのため、先行研究で提案されたオリ・パラ教育の促進方法の妥当性を学校の実態に即して検証する必要がある。2点目は、先行研究が対象とするオリ・パラ教育の実践内容の限定性である。前述の通り、東京大会に向けたオリ・パラ教育の普及においては様々な教育活動と関連付けた実践の実現が目指された。しかし、前述の先行研究では主にアスリート等を講師として招聘して講演や実技指導を行う体育・スポーツアウトリーチ実践のみを対象に課題や促進方法の検討が行われている。つまり、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践も対象とした普及の課題や促進方法の検討も必要である。

## 2. 目的と意義

本研究の目的は、オリ・パラ教育の普及の課題とその解決策を実践内容に基づいて教員の視点から検討するこ

とを通して、オリ・パラ教育を普及するためのより実現可能性の高い促進方法を明らかにすることである。

「第3期スポーツ基本計画」(スポーツ庁, 2022)において東京大会のレガシーを継承していく必要性が示される一方で、オリ・パラ教育の普及を安易に教員任せにすることに対する批判<sup>注5)</sup>が指摘されている。このような状況で、本研究の取り組みは、東京大会後の継続的なオリ・パラ教育の実現可能性を高めるための方法に関する基礎的な知見を得ることにつながると考えられる。

## II 研究方法

### 1. データの収集方法

#### 1.1 対象

本研究では、オリ・パラ教育事業に参画してオリ・パラ教育の実践を実現した教員を対象とした。オリ・パラ教育の実践状況に関して、「学校によって熱意の度合いも異なり、全国的には、東京および関東周辺の競技が実施される自治体と、そうではない地域との格差は大きい」(佐野, 2018, p. 103)という指摘がある。そのため、東京以外の地域におけるオリ・パラ教育の普及を目的としたオリ・パラ教育事業に着目することで、オリ・パラ教育の普及における困難をより可視化することができ、それゆえにより汎用性の高い促進方法の提案につながる知見を得ることができると考えた。

#### 1.2 調査の実施手続きと倫理的配慮

岡田ほか(2018, 2020)と同様に、オリ・パラ教育事業における実践の振り返りを行う教員研修(ワークショップ)において、オリ・パラ教育の実践を実現した教員を対象にアンケート調査を実施した。調査依頼の手続きは次の通りである。まず、教員研修(ワークショップ)を主催する教育委員会の担当者にアンケート調査を依頼した。その際、アンケート調査の趣旨を説明したうえで、調査への協力は任意であることや匿名で実施することで回答者が特定されないように配慮することを伝えた。このような手続きで教育委員会の承諾を得た8地域(東北地方1県、中部地方2県2政令市、近畿地方1県、中国地方1県、四国地方1県)において、教員研修当日に参加した教員に対しても同様の説明を行い調査への協力を依頼した。なお、調査実施時期は、2020年1月から2月である。

#### 1.3 調査項目

本研究では、教員の視点から見たオリ・パラ教育の普及における困難及びその解決策を実践内容に基づいて検討するために、以下の3つの質問項目を設定した。

1つ目は、「オリ・パラ教育の実践内容」である。オリ・パラ教育の中心的な内容である「体育・スポーツアウトリーチ実践」と「体育・スポーツアウトリーチ実践以外の実践」を大別した。

2つ目は、「オリ・パラ教育を実現する際の困難」である。岡田ほか（2018, 2020）や宮崎（2019）を参照し、「体育・スポーツアウトリーチ実践」では「講師の選定／系統的・発展的な内容の設定／興味・関心の維持／用具の手配／協力体制の構築／効果的な指導方法／その他」、  
「体育・スポーツアウトリーチ実践以外の実践」では「系統的・発展的な内容の設定／興味・関心の維持／用具の手配／協力体制の構築／効果的な指導方法／その他」を設定した。

3つ目は、「オリ・パラ教育を実現する際の困難の解決策」である。上記の「オリ・パラ教育を実現する際の困難」の中で選んだ回答に即して、「どのように解決したのか」について自由記述で回答を求めた。

## 2. データの分析方法（SCAT）

データの分析方法に関しては、「Steps for Coding and Theorization」（以下、「SCAT」）の「ステップ・コーディング」を採用した。SCATは、「データの準備」、「ステップ・コーディングの実施」、「ストーリーラインの記述」、「理論記述の試み」、「疑問・課題の記述」という分析手続きを明示的に残すことで「分析過程の省察可能性と反証可能性」（大谷, 2008, p. 40）を高める分析方法である。このような手続きによって、質的研究におけるデータ解釈の恣意性を可能な限り排除することがSCATの特徴である（大谷, 2019）。本研究では、「ストーリーラインの記述」までを実施して、オリ・パラ教育の普及を妨げる課題とその解決策の概念化を試みた。その際、「多様な観点を共有」（大谷, 2008, p. 39）するために、筆者と体育科教育学を専門とする共著者1名で意見をすり合わせ、一致しない場合は3人目の共著者に意見を求めるという手順をとった。

## III 結果

### 1. 回答者の属性

本研究では、前述した手続きで、オリ・パラ教育事業に参画する8地域でアンケート調査を実施した。アンケートの回答率は56.3%（175/314人）で、回答者の内訳は小学校77人、中学校39人、高等学校26人、特別支援学校11人、不明22人であった。

### 2. 体育・スポーツアウトリーチ実践の困難と解決策

体育・スポーツアウトリーチ実践における困難につい

ては、「関心・意欲の維持（43）」、「講師の選定（41）」、「効果的な指導方法（32）」、「系統的・発展的な内容の設定（25）」、「用具の手配（21）」、「協力体制の構築（19）」の順に回答が多かった。そして、それぞれの困難に対する解決策を整理すると、表1の通りである<sup>注6</sup>。なお、（ ）内は、概念の対象等の詳細を表しており、数字は回答数を示している。

そして、これらの結果を元に、表2のストーリーラインが得られた。

### 3. 体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の困難と解決策

次に、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践における困難については、「効果的な指導方法（52）」、「系統的・発展的な内容の設定（50）」、「興味・関心の維持（45）」、「協力体制の構築（29）」、「用具の手配（28）」の順に回答が多かった。そして、それぞれの困難に対する解決策を整理すると、表3の通りである<sup>注7</sup>。なお、（ ）内は、概念の対象等の詳細を表しており、数字は回答数を示している。

そして、これらの結果を元に、表4のストーリーラインが得られた。

## IV 考察

### 1. 体育・スポーツアウトリーチ実践の促進方法の妥当性

オリ・パラ教育では、「児童生徒がオリンピックやパラリンピアンに直接接する機会を設けることは、教育上有意義かつ効果的」（オリ・パラ教育に関する有識者会議, 2016, p. 9）であり、講師が「自らの経験を児童生徒や社会に的確に発信していくこと」（オリ・パラ教育に関する有識者会議, 2016, p. 9）が期待されている。しかし、前述の通り、本稿ではオリ・パラ教育として体育・スポーツアウトリーチ実践を実現した教員は、児童・生徒が単にスポーツ選手と接する機会を作るだけでは不十分であると捉え、事前・事後指導や実践に関する情報提供だけでなく、実践における教材の開発や学外者との連携、さらには講師や実践の対象の選定といった条件整備や、実践において図表・動画等の活用、ICTの活用、講師との交流する時間の充実を図る取り組みも行っている、というストーリーラインが得られた。このことは、様々な教育活動と関連づけた継続的なオリ・パラ教育実践の実現というオリ・パラ教育の普及の理念が確実に浸透している可能性を示唆している。

また、「興味・関心の維持（43）」に関わる促進方法として、先行研究で提案されているのが「映像資料の活

表1 体育・スポーツアウトリーチ実践の促進方法

●講師の選定	回答数	●用具の手配	回答数
学外者との連携 (行政4, 大学2, 近隣の学校3, スポーツ関連組織2, 一般1)	12	学外者との連携 (近隣の学校2, 行政1)	3
学内者との連携 (同僚8, 管理職1, 専門職1)	10	講師に依頼	1
早めの計画立案	3	代替物の利用	1
情報収集	1	<b>●協力体制の構築</b>	
聴く視点の設定 (誰が来てよい)	1	情報共有 (ちらし1, 職員会議1, 一般3)	5
<b>●系統的・発展的な内容の設定</b>		学年ごとの計画立案	1
事前・事後指導 (各教科4, 総合1, 特別活動1)	6	関連付けられる教科・領域の選定	1
年間計画の作成	2	学内者との連携 (図書館司書)	1
講師との連携	2	<b>●効果的な指導方法</b>	
教員研修	1	教材研究	4
児童に身に付けたい力を意識した指導	1	既存の教材の活用	3
<b>●興味・関心の維持</b>		学外者との連携 (講師、講師の所属会社)	2
事前・事後指導 (一般5, 集会4, 調べ学習2, 学級2, 体育1, 総合1, 自由時間1, 学年ごと1)	17	講演内容の解説	2
情報提供 (掲示物9, 講師の情報1, 実技指導があること1, 時事問題1, 一般1)	13	掲示物の作成	1
教材開発	3	ICTの活用	1
画像・動画の活用	3	実践事例の参照	1
講師の選定 (身近なアスリート)	1	教育活動との関連付け (総合)	1
時間配分の工夫	1		
ICTの活用	1		
対象の選定	1		
掲示物の作成	1		
講師と交流 (対戦形式)	1		
学外者との連携 (図書館)	1		

用」や「教育課程への位置づけの明確化」である。前者については、「興味・関心の維持」の解決策として「画像・動画の活用 (3)」が確認できる。後者については、「系統的・発展的な内容の設定」における「年間計画の作成 (2)」や「効果的な指導方法」における「教育活動との関連づけ (総合1)」という回答がわずかに確認できるのみである。このような結果から、「興味・関心の維持」という問題の解決策として、「映像資料の活用」や「教育課程への位置づけの明確化」という促進方法の妥当性は低い可能性が示唆される。ただし、オリ・パラ教育に限らず、教育活動において映像資料を活用することや教育課程の編成を考えることは、継続的・計画的な教育活動の実現に必要な不可欠である。そのため、上述の結果は、「映像資料の活用」や「教育課程への位置づけの明確化」が児童・生徒のオリ・パラ教育に対する「興味・関心の維持」につながらないということではなく、あくまで教員にとってこれらの方法を用いて「興味・関心の維持」をすることが現実的に難しいということを意

味していると考えられる。そのため、「映像資料の活用」や「教育課程への位置づけの明確化」を促す取り組みが求められる。具体的には、既存のオリ・パラ教育に関連する映像資料を組み込んだ実践モデルの開発やオリ・パラ教育を年間の活動として取り入れた教育課程の開発、さらには学習指導要領においてオリ・パラ大会に関することが内容として示されている中学校及び高等学校の保健体育科の体育理論領域や教科書でアスリートのエピソードを取り上げている特別な教科道徳の実践の充実も重要であろう<sup>注8)</sup>。

## 2. 体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の困難と促進方法

東京大会に向けたオリ・パラ教育の普及では、継続的なオリ・パラ教育の実現のために、様々な教育活動と関連づけたオリ・パラ教育の実践が求められている。このような体育・スポーツアウトリーチ以外の実践を実現する際の困難については、「効果的な指導方法」、「系統

表2 体育・スポーツアウトリーチ実践の実現過程に関するストーリーライン

<b>●講師の選定</b>
「学外者との連携」及び「学内者との連携」や「情報収集」を通して講師の選定を行っており、より適切な講師の選定のために「早めの計画立案」の必要性も認識されている一方で、講演を「聴く観点の設定」をすることで適切な講師が見つからなかった場合への対処も講じられた。
<b>●系統的・発展的な内容の設定</b>
実践の「事前・事後指導」や「年間計画の作成」、さらには「児童に身に付けたい力を意識した指導」を行うことで教育活動との連携を図っており、そのために「教員研修」を通じた教員間の理解の共有や、「講師との連携」の重要性も認識された。
<b>●興味・関心の維持</b>
「事前・事後指導」として、実践に関する「情報提供」だけでなく、「教材開発」、「画像・動画の活用」、「掲示物の作成」さらには「学外者との連携」や「ICTの活用」によって、アウトリーチ実践に対する興味・関心の維持が図られた。また、アウトリーチ実践においても、「講師の選定」、「時間配分の工夫」、「対象の選定」、さらには「講師との交流」を行うことで興味・関心を高める試みが行われた。
<b>●用具の手配</b>
「学外者との連携」で対処しているが、難しい場合は「講師に依頼」したり、「代替物の利用」も行われた。
<b>●協力体制の構築</b>
「情報共有」だけでなく、「学年ごとの計画の立案」、実践と「関連付けられる教科・領域の選定」、さらには「学内者との連携」を図ることで協力者を増やす試みも行われた。
<b>●効果的な指導方法</b>
「教材研究」、「学外者との連携」、「掲示物の作成」、「ICTの活用」、そして「教育活動との関連付け」を図るといった教員の創意工夫に基づく新しい取り組みだけでなく、「既存の教材の活用」や「講演内容の解説」、これまでの「実践事例の参照」といった少しでも教員の負担を軽減した指導方法も取り入れられた。

的・発展的な内容の設定」、「興味・関心の維持」、「協力体制の構築」、「用具の手配」の順に回答が多いという結果が得られた。そして、「効果的な指導方法」に困難を感じている教員が多かったことと、その解決策として「既存の教材の活用」が最も多かったことを踏まえて、本研究では、オリ・パラ教育の普及を担う教員は、体育・スポーツアウトリーチ以外のオリ・パラ教育の実践をどのように行えばよいのか、という点に不安を抱えており、その不安を解消するために既存の教材の活用、教育活動との関連付け、児童の実態に即した指導方法の工夫、ICTの活用、ルールを工夫したり、そのための準備段階において実践事例の参照や情報収集、さらには対象の選定や学外者との連携を図ったり、教員研修によってより効果的な指導方法の検討を行っているというストーリーラインが得られた。この点は、オリ・パラ教育の理念の柔軟性と表裏一体の問題である。というのも、オリ・パラ教育を様々な教育活動と関連づけて実施するという方向性は、オリ・パラ教育の普及を担う教員にとって、学校の実態に即して柔軟にオリ・パラ教育を実施できるという安心と同時に、何をすればオリ・パラ教育と

言えるのかという不安にもつながると考えられるからである。実際に、オリ・パラ教育事業における教員研修の効果を検証した先行研究においても、各学校でオリ・パラ教育の普及を担う教員のオリ・パラ教育の理念やその重要性に対する意識と比べて、実践に関する自信は研修を経ても高まらないことが示されている (Okada et al, 2019; 岡田・木浪, 2021)。このような不安はオリ・パラ教育に限らず、「不確実性」、「無境界性」、「再帰性」という特徴を有する教育という行為に必然的に伴うものである (佐藤, 1998)。

では、このような実践に対する教員の不安はどのように払拭できるのだろうか。この点については、次の2点を指摘できる。1点目は、意味づけである。高井良 (2015) は、教育行為が上述した特徴を有するがゆえに、教員は「自らの仕事の広がりや意味を、自分自身で探し出すことを求められている」(高井良, 2015, p. 4) と指摘している。実際に、オリ・パラ教育の普及の要因として、なぜオリ・パラ教育の普及に取り組むのかという教員によるオリ・パラ教育に対する意味づけの重要性が指摘されている (岡田, 2021)。2点目は、成功体験で

表3 体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の促進方法

●系統的・発展的な内容の設定		回答数	●協力体制の構築		回答数
教育活動との関連付け（一般4, 体育2, 英語1, 道徳1）		8	情報共有 （指導方法2, 職員会議2, 必要性1, 集会1, 実践参観1, 一般1）		8
目的の明確化・共有		4	担当教員の選定		3
学外者との連携（大学2, スポーツ関連組織, 地域）		4	掲示物の協同制作		1
年間計画の作成		2	実施時期の選定（行事の少ない冬季）		1
教員の理解の促進		1	●効果的な指導方法		
●興味・関心の維持			既存の教材の活用		8
情報提供（校内放送2, クイズ5, 掲示物5, 図書1, 実践例1）		14	教育活動との関連付け		5
内容の精選（体験的活動3, パラ種目2）		5	教員研修の実施		3
画像・動画の活用		4	実践事例の参照		3
教材開発		3	情報収集		2
既存の教材の活用		3	児童の実態に即した指導方法の工夫（一般2, 反転学習1）		3
教育活動との関連付け（特別活動1, 人権教育1）		2	ICTの活用		1
ICTの活用		1	対象の選定（全校）		1
対象の選定		1	学外者との連携（スポーツ関連）		1
●用具の手配			ルールの工夫		1
学外者との連携（近隣の学校4, 行政2, スポーツ関係団体1, 一般1）		8			
代替物の利用		4			

ある。教員には、自らの実践を自ら改善していく自律的学習を通して、成長し続けることが求められる（三和・外山, 2015）。そして、このような自律的学習を習得し、自らの実践を改善し成長し続けるためには、達成経験による教師効力感の向上の重要性が指摘されている（渡邊・中西, 2017）。近年では、このような達成経験を通じた教師効力感の向上のために、教師教育者が教員に寄り添い、助言をしたり励ましたりするコンサルテーションの有効性も示されている（白旗ほか, 2021）。このような先行研究の指摘を踏まえると、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の困難の解決策として、「情報提供（14）」や「情報共有（8）」が挙げられていることは重要である。つまり、これらは児童・生徒の「興味・関心の維持」や「協力体制の構築」のための解決策であるが、その背景には、各校で内容や指導方法に不安をかかえながら体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の実現を試みている教員にとって、実践事例等の情報を得たり教員間で共有したりすることが自らの実践に対する意味づけや成功体験となることにつながっている可能性が考えられる。この点をより明確にするためにも、オリ・パラ教育としての体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の実現過程を検討する必要がある。

## V まとめ

本研究の目的は、オリ・パラ教育の普及の課題とその解決策を実践内容に基づいて教員の視点から検討することを通して、オリ・パラ教育を普及するためのより実現可能性の高い促進方法を明らかにすることであった。その際、オリ・パラ教育事業に関わってオリ・パラ教育の実践を実現した教員を対象に、実現したオリ・パラ教育の実践内容（選択）、普及する上での困難（選択）、困難の解決策（自由記述）の3点について質問紙調査を実施した。自由記述に関しては、SCATを用いて分析をした。

その結果、オリ・パラ教育として体育・スポーツアウトリーチ実践を実現した教員の困難については、「関心・意欲の維持」（43）、「講師の選定」（41）、「効果的な指導方法」（32）、「系統的・発展的な内容の設定」（25）、「用具の手配」（21）、「協力体制の構築」（19）の順に回答が多かった。さらに、回答が多かった「関心・意欲の維持」（43）の解決策としては、様々な教科を活用した「事前・事後指導」や「情報提供」という回答が多かった。このことから、教員は児童・生徒が単にスポーツ選手と接する機会を作るだけでは不十分である、と考えていることが推察された。さらに、このような困難の解決策として、事前・事後指導や実践に関する情報提供だけ

表4 体育・スポーツアウトリーチ以外の実践の実現過程に関するストーリーライン

<p><b>●系統的・発展的な内容の設定</b></p> <p>「教育活動との関連付け」や実践の「目的の明確化・共有」を図り、それらを元に「年間計画の作成」をすることで内容の系統性・発展性をもたせるだけでなく、そのような取り組みを通して「教員の理解の促進」や「学外者と連携」を図る試みも行われた。</p>
<p><b>●興味・関心の維持</b></p> <p>実践に関する「情報提供」だけでなく、「内容の精選」、「画像・動画の活用」、「教材開発」、「既存の教材の活用」、「教育活動との関連付け」、「ICTの活用」によって実践の質の向上を図るだけでなく、より興味・関心が高い「対象の選定」といった取り組みも行われた。</p>
<p><b>●用具の手配</b></p> <p>「学外者との連携」で対処しているが、難しい場合は「代替物の利用」も行われた。</p>
<p><b>●協力体制の構築</b></p> <p>「情報共有」や「掲示物の協同制作」を通して協力的な教員を増やすだけでなく、「担当教員の選定」によって特定の教員で協力体制を築いたり、教員の協力が得られやすい「実施時期の選定」も行われた。</p>
<p><b>●効果的な指導方法</b></p> <p>「実践事例の参照」や「情報収集」を通して、「既存の教材の活用」、「教育活動との関連付け」、「児童の実態に即した指導方法の工夫」、「ICTの活用」、「ルールの工夫」といった指導方法が採用されるだけでなく、「対象の選定」や「学外者との連携」によって指導方法の効果を高めたり、「教員研修の実施」によってより効果的な指導方法の検討も行われた。</p>

でなく、実践における教材の開発や学外者との連携、講師や実践の対象の選定といった条件整備や、実践において画像・動画等の活用、ICTの活用、講師との交流する時間の充実を図る取り組みも行っていることが明らかになった。このことから、様々な教育活動と関連づけた継続的なオリ・パラ教育実践の実現というオリ・パラ教育の普及の理念が確実に浸透している可能性を示唆した。また、「興味・関心の維持」という問題の解決策として、先行研究で提案されている「映像資料の活用」や「教育課程への位置づけの明確化」という促進方法は現実的に採用が難しいことから、これらの方法を促すために実践モデルの開発等の支援策が必要であることが示唆された。

次に、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践における困難については、「効果的な指導方法」(52)、「系統的・発展的な内容の設定」(50)、「興味・関心の維持」(45)、「協力体制の構築」(29)、「用具の手配」(28)の順に回答が多かった。ここから、体育・スポーツアウトリーチ以外の実践を実現した教員が、何を(内容)、どのように(指導方法)行えばよいのか、という点に不安を抱えながら取り組んでいることが推察された。さらに、このような困難の解決策として、既存の教材の活用、教育活動との関連付け、児童の実態に即した指導方法の工夫、ICTの活用、ルールの工夫やそのための準備段階に

における実践事例の参照や情報収集、対象の選定や学外者との連携、教員研修を行っていることが明らかになった。さらに、上記の困難は、オリ・パラ教育の理念の柔軟性と表裏一体の問題であると考えられることから、教員に対する「情報収集」や「情報共有」によるオリ・パラ教育実践に対する肯定的な意味づけを醸成することやオリ・パラ教育実践の成功体験の重要性を示唆した。

なお、本研究がオリ・パラ教育事業に携わってオリ・パラ教育に取り組んだ教員を対象とした点には留意が必要である。というのも、特に体育・スポーツアウトリーチ実践の実施やパラスポーツ体験等の新しい教具が必要な実践には費用の問題があるが(宮崎, 2019)、オリ・パラ教育事業では各推進校で行うオリ・パラ教育実践に係る費用が配分されており、各推進校や教員は費用負担の問題を考えずにオリ・パラ教育の普及に取り組んでいたからである。本研究における体育・スポーツアウトリーチ実践の困難において、予算の問題が上らなかったことはその証左である。そのため、前述した個々の学校におけるオリ・パラ教育の体育・スポーツアウトリーチ実践の実現過程の検討という課題に加えて、行政的な支援を得ずに実現したオリ・パラ教育の実践の実現過程の検討の必要性を示唆している。今後の課題としたい。

## 注

- 注<sup>1)</sup> 理念通りにオリ・パラ教育が普及している実態については、東京大会組織委員会 (online), スポーツ庁 (online), 友添ほか (2018, 2019, 2020), 深見ほか (2021), 宮崎 (2019) が示している。
- 注<sup>2)</sup> 東京大会に向けた日本のオリ・パラ教育の普及については、Masumoto (2012) や佐野 (2018) がその実現可能性について批判的な見解を示している。
- 注<sup>3)</sup> オリ・パラ教育に関連した映像資料としては「I'm POSSIBLE」(パラサポ) や「指導参考資料」(スポーツ庁) 等があるが、これらの映像資料の活用方法やその効果についての実証的な検討は緒についたばかりである (松本ほか, 2021)。
- 注<sup>4)</sup> 教員間の連携については、岡田 (2020) が校長のリーダーシップによってオリ・パラ教育について全教員が理解を深める「意味づけの共有化」が図られることを明らかにしている。しかし、あくまで単一事例の研究であることから、このような課題の解決方法が妥当かどうか、という点については検討の余地がある。
- 注<sup>5)</sup> オリ・パラ教育の普及が結局のところ教員任せになることで、継続性に対する危惧が現実のものになりかねないという指摘も既にある (石坂, 2019; 渡, 2019)。
- 注<sup>6)</sup> 体育・スポーツアウトリーチ実践の困難と解決策の概念の生成過程は、表5の通りである。なお、森谷ほか (2020) を参考に、各概念の代表的なテキストのみ明記した。
- 注<sup>7)</sup> 体育・スポーツアウトリーチ実践以外の実践の解決策の概念の生成過程は、表6の通りである。なお、森谷 (2020) を参考に、各概念の代表的なテキストのみ明記した。
- 注<sup>8)</sup> 保健体育科や特別な教科道徳における実践の充実については、既にその重要性は指摘されており (宮崎ほか, 2020), 実際に少しずつ実証的な研究が進められている (乳井ほか, 2020; 佐々木, 2020; 広瀬・川上, 2021)。

## 文献

- 乳井勇二・秋和真澄・岡田悠佑 (2021) 高等学校「体育理論」領域におけるパラリンピックを教材とした授業モデルの効果検証. 日本体育大学スポーツ科学研究, 9 : 40-49.
- 深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・劉素雲・木浪龍太郎・青木彩葉 (2021) 2019年度におけるオリンピック・パラリンピック教育実践の取り組み: 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターの担当地域に着目して. スポーツ科学研究, 18 : 39-51.
- 広瀬健一・川上若菜 (2021) 小学校道徳科におけるオリンピック・パラリンピック教育の特質. オリンピックスポーツ文化研究, 6 : 73-86.
- 石坂友司 (2019) オリンピック教育は日本社会に何をもたらすのか. 第70回日本体育学会体育社会学専門領域シンポジウム配布資料.
- 紅林伸幸 (2007) 協働の同僚性としての〈チーム〉. 教育学研究, 74 : 36-50.
- 前田康裕・益子典文 (2006) 小学校社会科におけるデジタルコンテンツを活用した授業設計方略の検討. 日本教育工学会論文誌, 30 : 129-132.
- Masumoto,N. (2012) The legacy of the Olympic peace education of the 1964 Tokyo Olympic games in Japan. The International Journal of the History of Sport, 29 (9) : 1263-1280.
- 松本佑介・齊藤一彦・藤島廉・白石智也 (2021) パラリンピック教育が高校生の身体障害者に対するイメージに及ぼす効果の検討. 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」, 2 : 95-104.
- 宮崎明世 (2019) 学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の展開と評価. 体育学研究, 64 (2) : 855-868.
- 三和秀平・外山美樹 (2015) 教師の教科指導学習動機尺度作成およびその特徴の検討. 教育心理学研究, 63 (4) : 426-437.
- 森谷健太・中沢峻・佐々木秀之 (2020) 大学生の災害ボランティアへの参加動機の質的分析と参加推進の方策に関する一考察. 日本教育工学論文誌, 44 : 1-4.
- 内閣府 (2015) <https://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-tokyo/index.html>, (参照日2020年4月1日).
- 日本経済新聞 (2021) 開会式視聴率は56.4% 64年東京五輪に迫る. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE261M70W1A720C2000000/#k-think>, (参照日2022年8月16日).
- 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史・根本想 (2018) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究. オリンピック・パラリンピック教育を実施した教員の視点に着目して. 体育学研究, 63 (2) : 871-883.
- 岡田悠佑 (2020) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の可能性と限界. 現代スポーツ評論, 42 : 137-143. 創文企画: 東京.



表6 SCAT分析表(体育・スポーツアウトリーチ以外の実践)

作業的なテキストデータ(順ママ)	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念
保健学習「運動やスポーツの多様性を味わり方」と合わせて取り組むことによって、意欲が高まった。	保健、合わせて取り組む、意欲が高まった	保健の授業と関連付けて実施することによる意欲の向上	カリキュラムマネジメントによる意欲の喚起	教育活動との関連付け
テーマの設定を早く行い、全体に周知する。	テーマの設定、早く行い、全体に周知	学習目的の明確、早めの計画、共有	早めに学習目的を明確化して共有を図る	目的の明確化・共有
学校教育目標を具現化するための革立ての一つとして位置付けておいたことが大切だと思いましたが、	学校教育目標、具現化するための革立てとして位置付け、大切	学校の年間計画、目標達成の手段、重要	年間計画の中で取り組むことの重要性	年間計画の作成
指導する側の知識量を増やす、計画性を持たせる。	指導する側、知識量を増やす、計画性	教員、理解を深める、計画的な指導	教員の理解を深めて計画的な指導の実現	教員の理解の促進
教室へ作成した展示物を積極的に掲示する。	展示物、掲示する	展示物の作成	実践に関する資料の掲示	情報提供
体験を取り入れることで生徒に興味を持たせた。	体験を取り入れる、生徒、興味を持たせた	体験的な学習、子ども、興味喚起	より興味を高める学習内容の確保	内容の精選
オリ・バラのニュースや写真、コーナー、子どもの興味・関心を持続させている。	ニュースや写真、コーナー、子ども、興味・関心を持続	画像、掲示、子ども、興味・関心の維持	子どもに興味・関心を維持するための情報の可視化	画像・動画の活用
子どもにとって初めての体験だったので、全員ができるようネットの高さやルールを工夫した。	初めての体験、全員ができる、ルールを工夫	未経験、平等に達成、新たな教材	未経験者でも達成可能な教材開発	教材開発
Impossibleを用いたオリ・バラの学習を行った。	Impossibleを用いた、オリ・バラの学習	教材の活用、学習	既存の教材を活用した学習の実施	既存の教材の活用
ICT機器の活用(ハットを使って(動画、静止画)ジャベリックボールの投げ方の確認。	ICT機器の活用、(動画、静止画)、ジャベリックボールの投げ方の確認	ICTの活用、カメラ機能の利用、やり投げ練習用ボールの投げ方	ボールの投げ方をカメラで撮影して活用	ICTの活用
文化祭において、1クラスだけの展示発表にとどまらぬように、数クラスでオリ・バラに展示するものを取り上げた。	文化祭、1クラスだけの展示発表にとどまらぬ、数クラス	学校行事、小規模にならないように、複数のクラス	行事において複数のクラスで実施	対象の選定
卓球台が学校に1台しかなく、近隣の学校からもう1台借用した。	卓球台、近隣の学校、借用	用具の借用	学校からの用具の貸し出し	学外者との連携
身近なものをつかいました。(ゴールボール)	身近なもの、つかいました	身の回りのもの、代用	身近な代替物の利用	代替物の利用
実践したことについて教員間で情報の共有を図った。	実践したこと、教員間、情報の共有	他の教員への実践に関する情報共有	実践内容の共有	情報共有
先方への負担軽減のため、教務部で企画・立案して進めた。	先方への負担軽減、教務部、企画、立案	担当以外の教員の負担の除去、特定の教員、計画	学校運営の担当のみでの計画	担当教員の選定
掲示物はPTA役員やスクールコーディネーターが作成してくれた。	掲示物、PTA役員、スクールコーディネーター、作成	掲示物、支援者、共同制作	支援者の協力による掲示物の作成	掲示物の共同制作
コミュニケーションの一端として行いましたが、冬休みに実施したことで、時間にも少しゆとりが持てました。(ポッチャ体験)	冬休みに実施、時間にも少しゆとり	長期休暇、余裕	余裕のある時期に実施	実施時期の選定
「Impossible」やDVD映像を活用した。	映像、活用	映像資料の活用	映像の教材化	既存の教材の活用
職員が、「ああ、こうすればよいのだ!!」と感じたのは、シッティングバレー講習会が終わった後だった。	職員、こうすればよいのだ、シッティングバレー講習会、終わった後	教員、方法の習得、実践研修、終了後	教員の実践研修を通じた実践方法の習得	教員研修の実施
実践例を参考にさせていただいた。	実践例、参考	過去の実践、参照	過去の実践事例の参照	実践事例の参照
パラリンピック競技の「ゴールボール」を鑑賞したことがないので、児童に指導するときに効果的な指導方法が分からず、ネット等で調べたルール等指導した。	ゴールボール、鑑賞したことがない、ネット等、調べたルール等指導	パラ種目、未経験、インターネット、ルールの確認	未経験のパラ種目に関するルールの確認	情報収集
それぞれの子で児童の発能に合わせた指導を実施した。	それぞれの子、児童の発能に合わせた指導	発達段階、実態に即した指導	児童の発達段階に応じた指導	児童の実態に即した指導方法の工夫
アスリートの動きをとって、そのことを目指す。常にアスリートの写真(拡大したもの)を掲示し、話し合ったり確認したりする。	アスリートの動きをとって、そのことを目指す、アスリートの写真、話し合ったり確認したりする	講師の動き、撮影、目標、講師の写真、話し合い、参考	ICTによる目標としての講師の動きの活用	ICTの活用
(ゴールボール)正式なルールを理解した上で開発ルールを生徒が作り、初めての種目でも楽しめることができた。	開発ルール、生徒が作り、初めての種目、楽しめる	簡単なルールの工夫、生徒の創意工夫、初めての種目、楽しい	生徒による初種目でも楽しめるルールの工夫	ルールの工夫

- 岡田悠佑 (2021) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の普及過程に関する研究. 体育学研究, 66 : 343-360.
- 岡田悠佑・木浪龍太郎 (2021) オリンピック・パラリンピック教育の教員研修の方法に関する実践的研究. 東京体育学研究, 12 : 1-10.
- 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史 (2020) 教員の視点から見たオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究 実践内容と関連付けた効果及び課題の検討を通して. スポーツ教育学研究, 40 (2) : 31-50.
- Okada, Y., Tomozoe, H., Fukami, E., Yoshinaga, T., and Nemoto, S. (2019) A Study on the Effectiveness of in-service Teacher Training on Olympic and Paralympic Education in Japan: Toward Realization of more effective Practice of Olympic and Paralympic Education. Japanese Journal of Sport Education Studies, 39 (1) : 51-59.
- オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (2016) オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告. [http://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/00-4\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/00-4_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf), (参照日 2022年5月1日).
- 佐野慎輔 (2018) オリンピック・パラリンピック教育は必要か. 現代スポーツ評論, 38 : 98-106.
- 佐々木浩 (2020) 小学校におけるオリンピック・パラリンピック教育に関する実践的研究. 初等教育論集, 21 : 34-48.
- 佐藤学 (1998) 教師というアポリア. 世織書房.
- 白旗和也・大友智・西田順一・原祐一 (2021) 小学校体育科における教師効力感を高めるコンサルテーション方略の開発及び有効性の検討. 体育学研究, 66 : 869-890.
- スポーツ庁 (2022) 第3期スポーツ基本計画. [https://www.mext.go.jp/sports/content/0-00021299\\_2-0220316\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/0-00021299_2-0220316_3.pdf), (参照日 2022年5月1日).
- 高井良健一 (2015) 教師のライフストーリー. 勁草書房.
- 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 (online) <https://education.tokyo-2020.org/jp/about/yoi-don-school/#school>, (参照日 2022年5月1日).
- 東京都教育委員会 (online) [https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/o\\_p\\_ed-u.html](https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/o_p_ed-u.html), (参照日 2022年5月1日).
- 東京都オリンピック・パラリンピック準備局 (online) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会東京都ポータルサイト. <https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/special/watching/tokyo2020/games/legacy/index.html>, (参照日 2022年8月16日).
- 友添秀則・深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・根本想・竹村瑞穂・小野雄大・青木彩葉・鈴木康介 (2018) 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターにおけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み：小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育実践. スポーツ科学研究, 15 : 1-16.
- 友添秀則・深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・根本想・竹村瑞穂・小野雄大・青木彩葉 (2019) 2017年度におけるオリンピック・パラリンピック教育実践の取り組み：早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターの担当地域に着目して. スポーツ科学研究, 16 : 1-13.
- 友添秀則・深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・東海林沙貴・竹村瑞穂・根本想・小野雄大・梶将徳・青木彩葉・安田純輝 (2020) 2018年度におけるオリンピック・パラリンピック教育実践の取り組み：早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターの担当地域に着目して. スポーツ科学研究, 17 : 14-27.
- 渡邊駿太・中西良文 (2017) 日本における教師効力感に関する研究の動向と展望. 三重大学教育学部研究紀要教育科学, 68 : 245-254.
- 渡正 (2019) パラリンピック教育の課題と可能性. 第70回日本体育学会体育社会学専門領域シンポジウム配布資料.

---

連絡責任者

住所：〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

氏名：岡田 悠佑

電話番号：03-5421-5405

E-mail：okadayusuke69@gmail.com